

ブッシュクラフトの歴史的変容からみる脱都市志向の表現

37-195039 丁 春雨

1. 序論：植民から脱都市化まで、160年間以上生き延びてきたブッシュクラフト

1.1 研究背景

ここ数年、YouTube にブッシュクラフト (Bushcraft、以下、BC) 動画が盛んにアップロードされている。それらの動画には、ある個人がジャングルでナイフや斧、シャベルといった簡単な道具を駆使して小屋等の小規模建造物を作ったり、数十～百日に渡って生活したりする様子が記録されている。BC 動画は人気を集めており、「Bushcraft」を YouTube で検索すると再生量 1000 万回以上の動画だけで 37 件の結果が得られ、最も再生回数の多い動画は 1 億 800 万回再生されている。こうした現象は 2015 年頃から盛んになった。¹



図1 わら縄を用いてシェルターを作っている John Plant (2015)

しかしながら、BC という言葉自体はイギリス人植民者がオーストラリアやニュージーランドを開拓したときに生まれた言葉で、初出は 1851 年である。当時の BC は開拓のための実践術²だったというのが、現在 YouTube で見ることができる BC は、普段都市に暮らす人々が、楽しみとして非都市的な生活を送るというものが多い。また、BC 動画の作り手は、英語圏だけでなく、広くアジアにまで見られる。当初実践術だった BC は、いかにして脱都市志向を強め、グローバルな活動になったのだろうか？

1.2 研究目的

本研究では、非都市的な生活を楽しむ BC はいつから始まったか、どのように広がったか、なぜ近年流行しているかを明らかにする。それによって、脱都市志向という側面からみた BC の歴史を考察することを目的とする。

1.3 研究対象と方法

BC には複数の定義が提案されている。概ねある種の「スキル・知識」「ライフ/ライフスタイル」「キャンプ/キャンプスタイル」「特定な行動」「娯楽」「サバイバル」と解釈されている³。本研究では BC の定義を「自然環境を旅したりそこで暮らしたりする際に、その場にある材料を使って周りの生活環境を整え、それを維持するためのスキルと考え方、またはそのスキルと考え方を使用した活動」とする。

本研究の対象は、あえて自らを不便な条件下におくこ

とで非都市的な生活を楽しむ態度が見られる BC である。これに該当するのは、主に、1855 年以降の、市民階級の不特定多数に向けた BC の文字記録が現れた時期の BC である。

分析は、文献・史料調査や、インタビュー調査・アンケート調査・動画コメント内容の調査によって行う。

1.4 既往研究

BC を学術的に分析したものとして最も詳しい研究が Lisa Fenton による『‘Bushcraft’ and ‘Indigenous Knowledge’: transformations of a concept in the modern world』(2016) である。Fenton は前近代から近代の BC 及び関連する概念文献調査を行い、現代の BC 実践者を民族誌的に分析した。身体技能としての BC がどのように伝播されたか及び BC と土着的知識 (Indigenous Knowledge) の関係を明らかにした。Geoffrey Guy は『Bushcraft 2.0』(2018) において BC の歴史を短く総合的にまとめた。これらの考察で BC は土地に根ざした技術であると述べている。

この他に、BC の関連概念に関する研究が存在する。主にオーストラリアの「bushcraft」、「bushmanship」に関する研究、北米のフロンティア学説及びそれに基づいた「mountain man」、「woodcraft」、「frontiersman」の研究、「outdoor education」、「scouting」、「camping」に関する研究がある。これらは BC 的な要素を描写したが、BC を単独の活動として注目すること及びその脱都市志向に注目した分析は行っていない。そこで本研究は脱都市志向に注目して BC の歴史的変容を分析することで、BC と脱都市志向の関係に迫る。

なお、脱都市に関する言説には、社会学分野のマルクス (1844-45)、ヘーゲル (1820) の「疎外」論や、イヴァン・イリイチの「根源的独占」論 (1973)、が挙げられる。これらは、近代化した市民社会における依存関係がどのような弊害を持って、如何に人々の精神面を影響したかを明らかにした。本研究はこれらを参考に、自然と触れ合いたい、繋がりたいという人間のモチベーションを近代性への反省に繋げて解釈することを目指す。

2. 植民史における趣味的ブッシュクラフトの萌芽 (1855～1909)

2.1 ブッシュクラフト前史：英領植民地の開拓とブッシュクラフト

Bushcraft という言葉はイギリス人がオーストラリアやニュージーランドを開拓した 19 世紀半ばに生まれた。開拓者は当初は必要な物資を持参して船上で生活していたが、次第に領土拡張の軍事要請またはビーバー毛皮交易のような商業需要によって内陸部に進出することが求められるようになった。内陸部では自国の最新技術が使えないため、先住民に習って BC を行うようになった。

BC が当時の生活でいかに重要だったかは 1897 年 7 月 22 日の『Westminster Gazette』から知ることができる。あるオーストラリアでの遠征について「基本である

bushcraft を欠いていたために（中略）死んだ」と書かれている。また、J.M.R. Cameron 等（1999）は、George Grey による 1837 年のオーストラリア遠征の失敗と、Edward John Eyre による 1843 年の開拓の成功を例に、開拓で BC を行うことの必要性を問いた。

2.2 『Art of Travel』に見る趣味的ブッシュクラフト

19 世紀の北米では、西部内陸開拓の活発化に伴い、手段としての BC を紹介するハンドブックが多数出版された。その中に『Art of Travel』（1855、Francis Galton）というハンドブックがある。このハンドブックは旅行者・移民・兵士・布教者に向けて未知の土地での長距離・長時間の旅の方法を説いたもので、征服者のような思想はまだ残っているが、旅での生活を快適なものにするためにはその生活自体を楽しまなければならないと旅に必要な心意気が述べられた。ここでは BC という言葉そのものは登場しないが、「bush」での生活について述べ、そこに楽しみを見出している点で、本研究が対象とする BC が出現していると考えることができる。

この時期の他の BC 技能のハンドブックは、初期では軍事開拓のためだが、軍事組織によってできたものではなく、あくまで軍事内容に興味のある市民のためのものである。更に後期 1870～80s 軍事開拓のためのハンドブックから平民のリクリエーションにもなった。

2.3 「辺境人軍団」の「colonial craft」から見るブッシュクラフト概念の独立と転換の萌芽

先住民を通して BC の技能を把握した欧州人が増えた。技能だけでなく先住民の生活方式も取り入れた人たちは「辺境人（Frontiersman）」と呼ばれていた。彼らは 1904 年に自発的に「辺境人軍団（Legion of Frontiersmen）」を創立し、最新技術が使えない植民地で自然界に直接触れて得た生活上の技術を帝国の防衛に役立てようとした訓練のために辺境での生活スキルをマニュアル化した。

軍団の訓練のために、辺境人は辺境での生活スキルをマニュアル化した『辺境人のポケットブック』（1909）を出版した。こうしたポケットブックはイギリス国内でも人気を集めた。最新の技術を享受できる社会の中では「辺境人」の技術を使用する機会はほとんどないが、当時のイギリス国内では辺境の非日常さがロマンティックなものだと捉えられていたため大衆に受け入れられた（Macdonald, 1993）。

この人気を受けて、軍団は中にも辺境での生活スキルをイギリス平民に教えるために、イギリス国内にも「帝国コロニアル指導学校」を設立した（Macdonald, 1993、p.58）辺境での生活スキルを一般市民に紹介する際に、新たな呼称が必要となるが、この学校の広告ではそれを「colonial craft」と呼んでいた。これは世界初の成人向け BC 教育機構とも言える。（Fenton, 2016）

このように BC が実用的なスキルから辺境に興味のある都市人向けへ、即ち趣味的目的への転換の萌芽が見られる。この動向も後日のスカウト運動やキャンプなどの啓蒙になった。

2.4 小結

新大陸開拓の最初の段階では、欧州人は母国に帰ることを前提としていた。しかし時が経つにつれて彼らは移民として新大陸に定住し始め、母国から持ち込んだ最新技術で新大陸の自然を征服する態度よりも、BC を用いて生活する態度を身に付けた。このように、趣味的 BC が萌芽し、本来帝国の征服道具としての BC が目的を転換した。

その後フロンティアの消失により BC は植民の道具性という負担から解放されて、新しい時代に向かう。

3. 趣味的志向が主流になるまでのブッシュクラフトの発展史（1890s～1980s）

前章で見たように、非都市的な生活を楽しむ BC は既に 20 世紀初頭に現れていた。しかし、その BC が現在のようにならなくなったのはここ 30 年のことである。世界的に流行する前までの BC はどのように実践されていたのだろうか？

3.1 ブッシュクラフト BC を教育手段とする：スカウト運動（1907～）

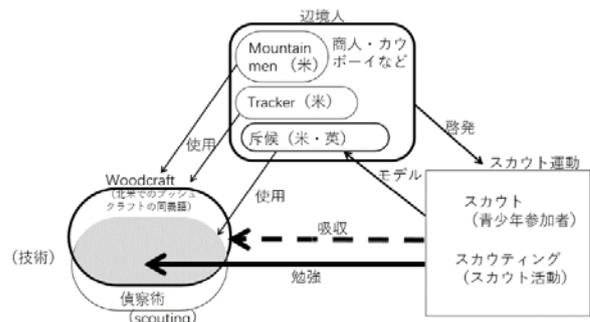


図2 「woodcraft」「スカウティング」「辺境人」の関係（筆者作成）

BC と同じような活動がアメリカでは「Woodcraft」⁴ という言葉で表されて、スカウト運動に見られる。

スカウト運動は 1907 年にイギリスの軍人であるパウエル（Lord Baden-Powell）が創立した青少年訓育運動である。パウエルは、当時のイギリスの都市では「都市化・現代化によって精神の病氣と墮落がもたらされている」「道徳と肉体の両方の観点で強い男が育っていない」と考えており、それらの問題を解決するために、新興国であるアメリカで（McDonald, 1993）、元々「辺境人」の生活手段であった「woodcraft」を教えようとした。そうした技術は当初「scoutcraft」とも呼ばれた。

このように BC はイギリス国内の社会問題へのアプローチとして反近代・脱都市化の思想と共に一時的に取り上げられたが、その後のスカウト運動の変容により、教育手段としての「woodcraft」即ち BC の重要度が低下した。

3.2 非都市志向を保つブッシュ BC：キャンプ（1890s～1970s）

本研究では 56 人の BC の実践者であるブッシュクラフターにインタビュー・アンケートを行った。その中で、4 人の回答者が BC を行うようになった直接的なきっかけとしてキャンプを挙げた。そこでキャンプ文化と BC の関係を確認する。

キャンプ文化は 19 世紀後半のアメリカで発展した。元々は軍事的な開拓技術だったが、次第に娯楽性が強まり、非都市志向を持つようになった。（Turner, 2002）この時点では BC と同じようにその場にある材料が使われていたが、1960 年代に自然保護の意識が高まった影響でキャンプによる自然への影響を最小に控える精神（「Leave No Trace」）が形成されると、軽型携帯コンロやテントを持ち込むことが主流になり、BC 要素は薄くなった（Turner, 2002）

当初のキャンプに見られる非都市志向は類似の活動である BC にも影響を与えたと考えられる。

3.3 ブッシュクラフトを道具とする：サバイバル（1941～）

世界大戦が勃発し、産業技術が発展した結果、非常事態の中で生活することを求められることが多くなり、BCが再び生活手段として注目されるようになった。Hiddins（1997）はBCを「サバイバル」と位置づけた。

そうしたサバイバルの書籍の中には、「bushcraft」という言葉を用いるものも多数含まれる。

サバイバルにおけるBCはその後変質し、楽しみとして捉えられるようになった。例えば Oelsluger はサバイバルスキルを紹介する本（1984）にBCをスカウティングのような楽しみとして紹介した。（1987）このようにまた、サバイバルを主題としたテレビ番組も登場し、そこでは一層娯楽化が進んだ。

3.4 非都市的な生活を楽しむブッシュクラフトの誕生：野外学校（1967～）

1967年、『Outdoor Survival Skills』（Olsen）の出版により本研究が対象とするようなBC、すなわち帝国主義の道具ではなく、最新技術を用いず、軍事的要素も持たず、非都市的な生活を楽しむBCが再び表舞台に登場した。時を同じくして、原生自然保護の意識が萌芽した1960年代のアメリカで、希望者にBCを含む生存・冒険・サバイバル術を有料で教える学校が生まれた。⁵そうした学校は人気を集め、一大業界を作り上げた。学校の経営者達はBCに関する書籍を出版し、BCが世界中に知られる契機を作った。中でも1987年に Mors Kochanski がカナダで出版した『Northern Bushcraft』は、オーストラリア・ニュージーランド以外で出版された書籍として初めて「bushcraft」という言葉を使用し、非都市的な生活を楽しむBCを紹介した。この書籍の成功は楽しみとしてのBCを全英語圏に広めることとなった。

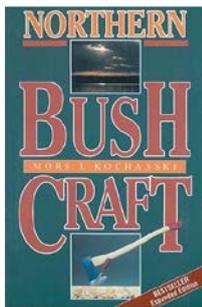


図2 『Northern Bushcraft』

現在アジアでBCについて中心的に発信している人物も、この野外学校の出身者である。（インタビュー）野外学校は現在のBCブームの基礎を作り出した。

3.5 人類学知識を実演するブッシュクラフト：復古再現

19世紀末に人類学が誕生した結果、Native American Indian や Mountain Man、northmen/norsemen などの前近代的な生活を行う人々に関する記述が盛んに行われるようになった。そうした記述は人々の非都市的な生活への憧れを喚起し、BCの実践を促した。彼らはその時代の人々の生活用品・服装・インテリアないし建築を再現し、その時代の技術を研鑽、実行し、定期的に集会を催した。かつて存在した時間と空間を創造し消費することによって、ロマンティックな信念が強化された。（1998、Russell W. Belk）このような歴史再現活動は、一種の現代都市への反発として捉えられる。

3.6 小結

1890年代から～1990年代に至る百年間の間、非都市を楽しむBCは様々な類似的概念の中に隠れていた。長い時間を経て、1960-70年代に単独進行するような活動になった。さらに1987年の『Northern Bushcraft』がBCの世界的流行の火付け役となった。

4. 非都市的な生活を楽しむBCの普及以降（1979～）

4.1 メディアの多様化とブッシュクラフトの世界的流行

1979年以降、書籍・テレビ・インターネットによるBCに関する発信が活発化になっており、実践者数も増えた。特に2010年以降、流行の拡大が確かめられる。

BCに関する書籍は2011年以前、英語で出版されたものがほとんどだったが、2011年以後には様々な言語の書籍が現れた。YouTubeでは単独投稿再生回数1000万回以上投稿者の居住地を調べると、BC発祥地である北米とオーストラリア、ニュージーランドに7人、それ以外21人と、旧英領以外からの投稿も多く見られた。また東南アジアからは竹を用いて建設を行う動画も投稿され、世界範囲での流行拡大が見られる。



図4 東南アジアで竹制の小屋を作っているBC（2021）

流行時期について、BCに関する書籍の出版年・BC動画の投稿年・実践者が初めてBCを行った時期の分析⁶から、BCは特に2008年、2015年、2018年に流行が拡大したことが分かった。その要因として考えられるのは、テレビと動画サイトである。まず、1979年以来、イギリスやオーストラリアの経験豊富なブッシュクラフター⁷たちがテレビで活躍し始めた。特に2004-05年及び2009年に放映されたRay Mearsの人気テレビ番組の影響が大きいと推測される⁸。2008年以後の流行はRay Mearsの影響だと考えられる。また、YouTube投稿者の増加とほぼ同時に、アンケート回答者の85%が2015年以後、70%が2018年以後にBCを始めた、そのきっかけを確認した⁹上、2015年以後の愛好者数の増加の一つの要因は、YouTubeなど動画サイトの影響だと分かった。

4.2 なぜスカンジナビアの「北の森」は非都市的な生活を楽しむBCのアイキャッチになったか

YouTubeではオーストラリア、デンマーク、カンボジアの投稿者の影響力が強い¹⁰。中でも時にはBCの「聖地」と思われているや、時にはBCの発祥地として誤認識されたスカンジナビアは注目に値する。スカンジナビア諸国には、法律では全ての原生地域に立ち入る権利が保証されている。（Geoffrey Guy、2018）アメリカにおける1910～30年代の公道建設によるキャンプブームのように、非都市への移動の自由はまず都市の発展によって確保されなければならない。また、極寒の気候で生まれた手作りBC道具の代表であり、技術とそれを作成したことの達成感が凝縮されたフェザースティックのような象徴的な道具がある。こうしたことがブッシュクラフターたちを惹きつけた理由だと考えられる。（川口、インタビュー）



図5、6

フェザースティックの作り方

4.3 中国人ブッシュクラフターの意識に見る現代アジアでのブッシュクラフトの非都市志向

一方アジアのブッシュクラフターも増えている。中国人を例として、彼らのBCへの態度とBCに取り組むきっかけを見てみよう。

筆者は56人にアンケート調査を行った。その結果によりBCに取り組むきっかけについて、野外学校がBC伝播の主要媒介である欧米(Fenton, 2016)と違って、動画とSNS¹¹のようなメディアである。もう一つは、彼らの過去の農村居住体験であった。

BCに興味を持っている人は主に都市の住民で、そのうち非都市に移住したい人が85%超え、非常に強い脱都市志向が見られる。また、BCへの態度について、スキルそのものより、非都市的な生活を楽しむBCのライフスタイルを重視する態度が主流になっている¹²。ただし、多くの者は希望を叶えて都市を脱出することができない。しかし、その理由は必ずしも「都市の快適と利便」¹³ではない。また、毎日BCだけの生活をしたと考える¹⁴人は少なくない。BCを単に一時的な娯楽として捉えることは軽率であり、生活の理想とみる人も少なからずいるのである。

4.4 小結

1979年以降のメディアからの発信が強まったことから、BCは世界に拡散した。2008、2015、2018年の三回の顕著な流行拡大が発生した。ただし、メディアだけがこの拡大の原因ではなく、自然に立ち入る権利が普遍的に与えられているスカンジナビアの環境や幼少時代の農村居住の体験の有無など、多様な前提条件があることが明らかになった。また、BCの主流になっている目的は、確かに非都市的な生活を楽しむことであるが、BCへの態度は、それを単なる娯楽としてではなく、日常生活スタイルにしたいと考える傾向も強い。

5. 結章：結論と示唆

5.1 インタフェース：なぜブッシュクラフトが時代と地域を越えて流行したのか

BCの歴史を紐解くと、最初は開拓のツールであったが、非都市的な行為を楽しむという感覚が19世紀には芽生えていた。なぜこうした非都市志向のBCは時代と地域を越えて160年以上も普遍的に人々の関心を惹きつけたのか。

書籍やテレビ、動画サイトなどメディアの影響は勿論みられるが、それらはすべての要因ではない。それは行動に移す契機である。アメリカの野外学校経営者Tamarack Songへのインタビューで、なぜ文明の恵みの下にわざわざ非都市的なものを求め始めたかについて、人々の生活経験には「インタフェース」が必要だと言及した。筆者の考えでは、都市と非都市の両方の環境に接触できるインタフェースが本論文の定義するBCを始める原因である。19世紀～20世紀初頭の植民地では、インタフェースは内陸開拓に伴い先住民生活と都市生活がぶつかるフロンティアである。1979年以降のスカンジナビアにおいて、インタフェースは先進国の日常になっている都市の恵みと豊かな自然及び自然へのアクセス権である。途上国の場合のインタフェースは、経歴や記憶の中での都市と非都市及びその強いコントラストだと考えられる。中国でこの20年間の都市化率が36.09%から63.89%まで急上昇した。このような途上国での都市の変化がこの時代(2015～2021)のBCの流行の広がりにも現れていると言えるだろう。

一方、「都市離れ」現象が見える現在、BCにおけるメディアの役割と同じように新型コロナウイルスの流行も以前から人々の心の中の「モヤモヤ」を引き出した契機ではないか？そしてその「モヤモヤ」は、都市と非都市のインタフェースである可能性もあるではないか？

5.2 ブッシュクラフトから見る現代社会をヒーリングするアプローチ

BCが好きな人々はBCの何に一番惹かれるのか。私たちは消費者として都市の依存関係に絡み合っており、提供された商品以外の選択をするのを許さないような形で支配されている、また、労働者として機械に従属するなど市民社会の弊害が指摘されている¹⁵。BCでは道具の製造と改造を提唱する。例えばテントでいえば、キャンパスやタープ一枚で、天候や人数におじて様々なスペースを作れる。また、自力で森林・雪地・砂漠・ジャングルに相応しい材料で靴・服・鞆・シェルターの修理ができる。BCでは異なる環境向けの製品を買う必要はない。BC動画を視聴する際に「私もできそう」「私は生産過程を理解できるから」と回答した人が多い¹⁶。また現代ブッシュクラフターには道具の自作を誇りにした人が少なくない¹⁷。彼らはローテクな汎用道具を使って、アフオーダンス¹⁸を読むスキルを上達させた。製造だけでなく、旅行中の観察から利用可能な環境を読み込むことで、自信と満足感を得ることできるだろう。

〈写真出典〉

1 John Plant. 2015-09-05. [online] <https://www.youtube.com/watch?v=P73REgi-3UE>. 3 Mors L. Kochanski. 1987. Northern bushcraft. Lone Pine; Edmonton, Alberta. 1988. 表紙 4 Primitive Survival Tool. 2021-07-17. [online] <https://www.youtube.com/watch?v=olk-ex751D> 5 Native Survival and Bushcraft. 2012-12-08. [online] <https://www.youtube.com/watch?v=YeKOMx5dQLY> 6 Mors L. Kochanski. 1988. Bushcraft: outdoor skills and wilderness survival. Vancouver: Lone Pine Publishing, 2016. p.36 [以上 2022-01-16 アクセス]

〈注釈〉

- 1 筆者のYouTubeデータ統計(2021-10-06まで)による。
- 2 OED(『オックスフォード英語辞典2nd.ed.』)および1851年7月21日『The Sydney Morning Herald』
- 3 複数の活動家の発言・インタビュー・アンケートによる。
- 4 「woodcraft」は主にアメリカの「辺境人」の生活から生まれたものである。改造を経てヨーロッパ化された原始的技術を指すものである。(Fenton, 2016)
- 5 1962年のアウトワード・バウンドアメリカ分校、1965の野外リーダーシップ学校、1968年のBoulderアウトドアサバイバル学校が統廃設立された。
- 6 WorldcatとBooksの書籍の出版データより、1988～1997、2005～2006、2008～2010、2012～2013、2015～現在の幾つ拡大期、アンケートにより、2013～2015、2018～の2つの拡大期、筆者が整理したBCに関するYouTube動画データにより、2015年と2017年～現在の2つの拡大期が見られる。
- 7 例えば、イギリスのエddie McGee(1979年)、オーストラリアのLes Hiddins(1987-1996年)、Ray Mears(1997年～)
- 8 Ray Mearsの2004-05及び2009年のテレビ番組が高い人気を集めた(Fenton, 2016)、アンケートでも彼の影響力を確認できる。
- 9 34%～65%の人はインターネット上の動画の影響を受けてBCを始めた。
- 10 それぞれの動画を見たことある率は、67%、71%、77%である。
- 11 ソーシャルネットワークサービス(Social Networking Service)
- 12 五種類の定義の件数は:「スキル・知識」(7件)「ライブ」(11件)「キャンプ」(9件)「特定な行動」(4件)「娯楽」(5件)「サバイバル」(5件)。
- 13 これを言及したのは5人(9.4%)しかいない
- 14 「今の現実的な制約を一旦置いて、毎日BCだけをするように生活したいか？」に対して、35.85%が「はい」を、47.17%が「いいえ」を答えた
- 15 イリイチ(1973)、ヘーゲル(1820)、マルクス(1844)による。
- 16 カンボジア投稿者「Primitive Survival Tool」の動画に関するアンケート
- 17 Fenton(2016)のアンケートによる
- 18 J. J. Gibsonによる認知心理学の概念。環境から提示され、行為者に特定の行為の可能性を与える情報(三嶋博之、1997、Gibson、1966&1979)

〈注釈〉

主要参考文献

- ・ Lisa Fenton. 2016. 'Bushcraft' and 'Indigenous Knowledge': transformations of a concept in the modern world.
- ・ MacDonald, R. H. 1993. *Sons of the Empire: The frontier and the Boy Scout movement, 1890-1918*. Toronto: University of Toronto Press.
- ・ Michael Humphries. 2012. 'The eyes of an empire': the Legion of Frontiersmen, 1904-14'. *Historical Research*. 85(227), pp. 133-158.